大学生のネガティブな反すうが対人ストレッサーの増加に与える影響

― 攻撃性と社会的状況からの回避行動を媒介変数として ―

小澤　崇将[1]・長谷川　晃[2]
1：東海学院大学大学院人間関係学研究科，2：東海学院大学人間関係学部

要　約

本研究では，ネガティブな反すうが対人ストレッサーに影響を与えているかを検討した。また，ネガティブな反すうと対人ストレッサーの媒介変数の候補として攻撃性と社会的状況からの回避行動を取り上げ，検討を行った。大学生168名にネガティブな反すう尺度，対人ストレスイベント尺度，日本語版Buss-Perry攻撃性質問紙，Liebowitz Social Anxiety Scale 日本語版，Beck Depression Inventory-II日本語版への回答を求めた。ネガティブな反すうは対人ストッレサーの増加と正の有意な相関が認められた。また，対人ストレスイベント尺度を従属変数とし，他の尺度を独立変数とした重回帰分析の結果，抑うつに加え，社会的状況からの回避行動が対人ストレッサーに影響していることが示された。このことから，ネガティブな反すう傾向の高い者は社会的状況を回避することにより，対人ストレッサーの生成を導いていることが示唆された。

キーワード：ネガティブな反すう，対人ストレス，攻撃性，社会的状況からの回避行動，抑うつ

問題と目的

伊藤・上里(2001)は，従来提唱された反すうの概念について批判的に吟味し，反すうが生じる原因を限定せず，反すうの対象をネガティブな事柄とした「ネガティブな反すう」を提唱した。ネガティブな反すうは「その人にとって，否定的･嫌悪的な事柄（ネガティブなこと）を長い間，何度も繰り返し考え続けること」と定義される。また，ネガティブな反すうを測定する尺度として，「ネガティブな反すう傾向」と「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」の２因子からなる，ネガティブな反すう尺度を作成した。この２因子のうち，ネガティブな反すう傾向の方が過去に経験されたうつ状態との関連が強いことから，以後の研究では，ネガティブな反すう傾向がネガティブな反すうの指標として用いられている。

ネガティブな反すうは抑うつの悪化やうつ病発症のリスクを高める要因の一つであると考えられる。例えば，横断的調査において，ネガティブな反すうが強い大学生や成人は他の者と比べて，より強い抑うつ状態にあることが報告されている(村山・岡安，2012a)。また，伊藤・竹中・上里(2005)は，大学生を対象に縦断的調査を行い，１回目の調査で測定されたネガティブな反すうが８ヶ月後に測定されたうつ状態の増加を予測することを示した。更に，伊藤他(2005)は，１回目の調査で測定された抑うつに加え，完全主義，執着性格，非機能的態度の影響を統制した上でも，ネガティブな反すうによるうつ状態の予測力が有意であることを示した。つまり，完全主義，執着性格，非機能的態度を持つ者は，共通して，ネガティブな反すうをする可能性が高く，ネガティブな反すうを行うことによって，うつ状態が引き起こされると示唆された。

ネガティブな反すうの強さは経験するストレッサーの程度によって変化しうることが示唆されている。例えば，大学生やコミュニティを対象とした縦断的調査では強い（もしくは多くの）ストレッサーを経験した者ほど反すうが強まることが報告されている(村山・岡安，2012b)。一方，ネガティブな反すうは逆にストレッサーを増加させる効果があることも示唆されている。

村山・岡安(2014)は，成人を対象とした縦断的研究を行うことにより，ネガティブな反すうは直接的に抑うつを悪化させるのではなく，ストレッサーの生成を促すことを介して抑うつの悪化を引き起こすことを示した。村山・岡安(2014)と同様に，大学生を対象とした研究においてもネガティブな反すうがもたらす抑うつへの縦断的な影響はストレッサーの生成によって媒介されることが認められている(村山・岡安，2012b)。このことから，ストレッサーの生成を媒介する反すうによる抑うつへの間接的影響は対象者の年齢や属性にかかわらず認められると考えられる。さらに，村山・岡安(2014)は様々なストレッサー領域がもたらす影響を検討した。その結果，「生きがいや人間関係」ストレッサーのみがネガ

ティブな反すうと抑うつの縦断的な関係を媒介した。つまり，ネガティブな反すうが強い者ほど生きがいや人間関係のストレッサーを経験し，生きがいや人間関係のストレッサーを強く経験した者ほど７ヵ月後には抑うつやネガティブな反すうが強まることが示された。このことから，ネガティブな反すうの影響はあらゆる領域のストレッサーに認められるものではなく，特定領域のストレッサーに限定的に現れるものであると考えられる。

村山・岡安(2014)では，ネガティブな反すうは特に生きがいや人間関係のストレッサーの生成を導くことが示唆された。しかし，ネガティブな反すうという思考自体がストレッサーの生成という環境の変化を起こしているとは考えがたい。本研究では，ストレッサーを対人的な出来事に限定し，ネガティブな反すうと対人ストレスの関連を再検討した上で，その関連を媒介するメカニズムについて探索する。

対人ストレスとは，否定的対人関係の総称的概念である(橋本，2003)。橋本(1997)は対人ストレスイベントの項目群を因子分析し，社会の規範からは逸脱した顕在的な対人衝突事態である「対人葛藤」，社会的スキルの欠如などにより劣等感を触発する事態である「対人劣等」，対人関係を円滑に進めようとすることにより気疲れを引き起こす事態である「対人摩耗」を抽出した。

ネガティブな反すうはこれらの対人ストレッサーの生成を導くと予想される。また，この関連を媒介する候補として，攻撃性と社会的状況からの回避行動が挙げられる。

攻撃性とは，他者に身体的，心理的に苦痛を与える行為，また，それを願望する内的状態を攻撃的な反応とし，他の人々や出来事などの一定の刺激に対し攻撃的に反応する傾向があることと定義される(大渕・北村・織田・市原，1994)。攻撃性を測定する尺度は多数存在するが，その代表的な尺度として日本版の攻撃性質問紙（Buss-Perry Aggression Questionnaire: BAQ; 安藤・曽我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井，1999)が挙げられる。BAQは，短気，敵意，身体的攻撃，言語的攻撃の四つの下位尺度から構成される。「短気」は怒りの喚起されやすさを測定する尺度で，怒りっぽさ，怒りの抑制の弱さなどを測定する項目から成る。「敵意」は他者に対する否定的な信念・態度を測定する尺度で，他者からの悪意や軽視など猜疑心や不信感を測定する項目から成る。「身体的攻撃」は身体的な攻撃反応を測定する尺度で，暴力反応傾向，暴力への衝動，暴力の正当化などを測定する項目から成る。「言語的攻撃」は言語的な攻撃反応を測定する尺度で，自己主張，議論好きなどを測定する項目から成る。

齋藤・沢崎・今野(2008)は，BAQとネガティブな反すう尺度の相関を検討した。その結果，短気，敵意とネガティブな反すうに正の相関が見られ，言語的攻撃とネガティブな反すうとでは負の相関が見られた。齋藤他(2008)では，ネガティブな反すうはBAQの身体的攻撃や言語的攻撃という，他者に直接攻撃する行動傾向と正の関連が認められず，逆に言語的攻撃と弱い負の相関が認められた。しかし，短気や敵意という攻撃性の２側面との関連が認められ，これらの２側面も他者との関係を悪化させる要因であると考えられることから，ネガティブな反すうと対人ストレスの関連を媒介する要因である可能性がある。

また，ネガティブな反すうと対人ストレッサーの関連を媒介することが予想されるもう１つの変数として，社会的状況からの回避行動が挙げられる。社会的状況からの回避行動は，社交不安症(Social Anxiety Disorder: SAD)の診断基準の１つであり，不安や緊張を経験した社会的状況を恐れ，避けることである。

城月・笹川・野村(2007)は共分散構造分析を用い，ネガティブな反すうがSAD症状と抑うつの双方に影響することを仮定したモデルの検討を行った。その結果，ネガティブな反すうは社会的状況からの回避行動や，その状況での苦痛度を強めることが示された。

周囲の他者を回避し続けると，そのことに気づいた他者から否定的な印象を持たれ，否定的な対応を受ける可能性がある。また，他者と話し合いをしたり，他者の助けが必要な場面でも会話をすることができず，そのことが状況の悪化を招き，対人関係を悪化させることもあるだろう。

以上を踏まえ，本研究では以下の２点の検討を行う。まず，ストレッサーを対人ストレッサーに限定し，ネガティブな反すうが対人ストレッサーに影響を与えているかを検討する。また，先行研究では，ネガティブな反すうが対人ストレッサーの生成を促すメカニズムについて検討が不十分である。そこで，媒介変数の候補として攻撃性と社会的状況からの回避行動を取り上げ，ネガティブな反すうが対人ストレッサーを強めるメカニズムについて探索する。なお，ネガティブな反すうは抑うつと密接に関連があるため，ネガティブな反すうと対人ストレスや攻撃性・社会的状況からの回避行動の関連は，抑うつの影響を介した擬似相関である可能性がある。そのため，以上の２点の検討を行う際，抑うつの影響を統制した分析も行う。

方法

調査協力者

東海地方の４年制大学に在籍している大学生200名を調査対象とした。全調査対象者のうち，回答に不備があったものを除外し，168名（男性62名，女性106名，平均年齢20.47歳，SD=2.33）を有効回答者とした。

調査時期

2014年10月初旬～11月中旬に実施した。

質問紙の構成

ネガティブな反すう尺度(伊藤・上里，2001）「ネガティブな反すう傾向」と「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」の２下位尺度から構成される尺度である。このうち，ネガティブな反すう傾向の得点がネガティブな反すうの指標として使用され，得点が高いほどネガティブな反すうの傾向が強いことを表す。全11項目に対して，「あてはまらない（１点)」から「あてはまる（６点)」の６件法で回答を求めた。本尺度は十分な内的整合性が認められており，抑うつなどとの間に相関が示され，一定の基準関連妥当性が認められている（伊藤・上里，2001）

対人ストレスイベント尺度(橋本，1997）「対人葛藤」，「対人劣等」，「対人摩耗」という３つの下位尺度から構成される尺度である。全30項目に対して，過去３ヶ月のうちにどの程度の頻度で起こったかを，「全くなかった（１点)」から「しばしばあった（４点)」の４件法で回答を求めた。

日本語版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ; 安藤他，1999）Buss & Perry（1992）の攻撃性質問紙をもとに作成された尺度であり，情動的側面である「短気」，認知的側面である「敵意」，攻撃性の行動的側面である「身体的攻撃」および「言語的攻撃」の４つの下位尺度によって構成される。全24項目に対して，「まったくあてはまらない（１点)」から「非常によくあてはまる（５点)」の５件法で回答を求めた。

Liebowitz Social Anxiety Scale（LSAS）日本語版（LSAS-J；朝倉・井上誠・佐々木史・佐々木幸・北川・井上猛・傳田・伊藤・松原・小山，2002）本尺度は，社交不安症の患者が症状を呈することが多い行為状況（13項目)，社交状況（11項目）の24項目からなり，それぞれの項目に対して恐怖感／不安感と回避の程度を０～３の４段階で評価するものである。このうち，回避が社会的状況からの回避を測定する指標である。

Beck Depression Inventory-Ⅱ(BDI-Ⅱ)日本語版（小嶋・古川，2003）抑うつ症状の重症度を判定するための，21項目からなる自記式質問調査票である。DSM-Ⅳの診断基準に基づいた抑うつ症状の有無とその程度の指標として開発された。本尺度は，過去２週間の状態を尋ねる21項目で構成されており，４件法（０～３点）で回答を求めた。小嶋・古川(2003)によると，21項目による重症度の基準点は13点以下が異常なし，14～19点が軽度，20～28点が中等度，29点以上が重度のうつ病に相当する。

手続き

集団配布，集団回収および個別回収により，無記名式の質問紙調査を実施した。質問紙調査の実施の前に，調査の目的，プライバシーの保護，調査方法，調査結果の取り扱いに関して説明し，承諾した場合のみ調査に回答するように求めた。所要時間は15分程度であった。

結果

Table 1に記述統計量を示した。また，Table 2に各尺度間の相関係数を示した。

ネガティブな反すう傾向はBAQの中で短気，敵意，およびBAQ合計と正の有意な相関が得られ(r=.22, .35, .21, p<.01)，LSASの恐怖感／不安感，回避，およびLSAS合計とも正の有意な相関が得られた(r=.34, .29, .33, p<.01)。また，対人劣等，対人摩耗，および対人ストレス合計と正の有意な相関が得られ(r=.39, .25, .28, p<.01)，BDIとも正の有意な相関が得られた(r=.41, p<.01)。

身体的攻撃は対人劣等と正の有意な相関が得られ(r=.17, p<.05)，BDIとも正の有意な相関が得られた(r= .21, p<.05)。短気は恐怖感／不安感，回避およびLSAS合計と正の有意な相関が得られた(r=.27, p<.01; r=.19, p<.05; r=.24, p<.01)。また，対人葛藤，対人劣等，対人摩耗，および対人ストレス合計と正の有意な相関が得られ(r=.27, .26, .22, .27, p<.01)，BDIとも正の有意な相関が得られた(r=.26, p<.01)。敵意は恐怖感／不安感，回避，およびLSAS合計と正の有意な相関が得られた(r=.36, .28, .34, p<.01)。また，対人葛藤，対人劣等，対人摩耗，および対人ストレス合計と正の有意な相関が得られ(r=.28, .44, .28, .38, p<.01)，BDIとも正の有意な相関が得られた(r=.44, p<.01)。言語的攻撃は恐怖感／不安感，回避，およびLSAS合計と負の有意な相関が得られた(r=-.20, -.23, -.23, p<.01)。BAQ合計は恐怖感／不安感，回避，およびLSAS合計と正の有意な相関が得られた(r=.20, p<.01; r=.15, p<.05; r=.19, p<.05)。また，対人葛藤，

Table 1　記述統計量

	M	*SD*
ネガティブな反すう傾向	26.68	8.24
ネガティブな反すうのコントロール不可能性	13.76	4.23
身体的攻撃	19.45	6.01
短気	14.92	4.31
敵意	21.82	5.04
言語的攻撃	14.39	3.83
BAQ 合計	70.60	14.16
恐怖感/不安感	33.84	15.75
回避	27.05	14.92
LSAS 合計	60.90	29.08
対人葛藤	15.96	6.67
対人劣等	18.68	7.48
対人摩耗	11.53	4.59
対人ストレス合計	57.32	20.30
BDI	16.49	12.01

対人劣等，対人摩耗，および対人ストレス合計と正の有意な相関が得られ(r=.25, .27, .21, .26, p<.01)，BDIとも正の有意な相関が得られた(r=.30, p<.01)。

恐怖感／不安感は対人葛藤，対人劣等，対人摩耗，および対人ストレス合計と正の有意な相関が得られ(r=.29, .51, .40, .45, p<.01)，BDIと正の有意な相関が得られた(r=.43, p<.01)。回避は対人葛藤，対人劣等，対人摩耗，および対人ストレス合計と正の有意な相関が得られ(r=.25, .41, .34, .37, p<.01)，BDIと正の有意な相関が得られた(r=.36, p<.01)。LSAS合計は対人葛藤，対人劣等，対人摩耗，および対人ストレス合計と正の有意な相関が得られ(r=.29, .49, .39, .43, p<.01)，BDIとも正の有意な相関が得られた(r=.42, p<.01)。

対人ストレス尺度のすべての得点はBDIと正の有意な相関が得られ，相関係数は対人葛藤，対人劣等，対人摩耗，対人ストレス合計でそれぞれ.35，.49，.44，.49(すべてp<.01)であった。

次にBDIの影響を統制した上での尺度間の偏相関係数を算出した(Table 2)。ネガティブな反すう傾向はBAQの中で，敵意と正の有意な偏相関が得られ(pr=.21, p<.01)，LSASの恐怖感／不安感，回避，およびLSAS合計と正の有意な偏相関が得られた(pr=.19, .17, .19, p<.05)。また，対人ストレス尺度の中で，対人劣等と正の有意な偏相関が得られた(pr=.23, p<.01)。

最後に，対人ストレスの合計得点や各因子の得点を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果をTable 3に示した。ネガティブな反すう傾向，BAQ合計，回避，およびBDIを独立変数，対人ストレス合計を従属変数とした，強制投入法による重回帰分析を行った。その結果，回避とBDIの標準偏回帰係数が有意であった(β=.20, .36, p<.01)。決定係数は.30(p<.01)であった。対人葛藤を従属変数とした重回帰分析を行った結果，BAQ合計とBDIの標準偏回帰係数が有意であった(β=.16, p<.05; β=.28, p<.01)。決定係数は.17(p<.01)であった。対人劣等を従属変数とした重回帰分析を行った結果，ネガティブな反すう傾向，回避，およびBDIの標準偏回帰係数が有意であった(β=.17, p<.05; β=.23, p<.01; β=.30, p<.01)。決定係数は.35(p<.01)であった。対人摩耗を従属変数として重回帰分析を行った結果，回避とBDIの標準偏回帰係数が有意であった(β=.19, .33, p<.01)。決定係数は.23(p<.01)であった。

Table 2　各尺度間の相関係数（左下）と BDI の影響を統制した偏相関（右上）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1.ネガティブな反すう傾向	-	.48 **	-.00	.13	.21 **	-.03	.10	.19 *	.17 *	.19 *	-.04	.23 **	.08	.10	
2.ネガティブな反すうのコントロール不可能性	.54 **	-	-.05	-.05	-.08	-.22 **	-.12	.13	.10	.12	-.12	.03	-.06	-.06	
3.身体的攻撃	.08	.01	-	.47 **	.39 **	.30 **	.79 **	.00	.07	.04	.06	.08	.04	.04	
4.短気	.22 **	.02	.50 **	-	.41 **	.43 **	.77 **	.18 *	.10	.15	.20 **	.15 *	.12	.17 *	
5.敵意	.35 **	.06	.42 **	.47 **	-	.26 **	.70 **	.21 **	.14	.19 *	.14	.28 **	.10	.20 **	
6.言語的攻撃	-.08	-.24 **	.27 **	.38 **	.18 *	-	.63 **	-.17 *	-.21 **	-.20 **	.10	-.09	-.00	.00	
7.BAQ 合計	.21 **	-.02	.80 **	.79 **	.73 **	.56 **	-	.08	.05	.07	.16 *	.15 *	.09	.14	
8.恐怖感/不安感	.34 **	.24 **	.10	.27 **	.36 **	-.20 **	.20 **	-	.76 **	.94 **	.16 *	.38 **	.26 **	.30 **	
9.回避	.29 **	.20 **	.14	.19 *	.28 **	-.23 **	.15 *	.79 **	-	.93 **	.14	.29 **	.21 **	.23 **	
10.LSAS 合計	.33 **	.23 **	.13	.24 **	.34 **	-.23 **	.19 *	.95 **	.94 **	-	.16 *	.36 **	.25 **	.29 **	
11.対人葛藤	.10	-.06	.13	.27 **	.28 **	.05	.25 **	.29 **	.25 **	.29 **	-	.62 **	.58 **	.87 **	
12.対人劣等	.39 **	.18 *	.17 *	.26 **	.44 **	-.13	.27 **	.51 **	.41 **	.49 **	.68 **	-	.63 **	.87 **	
13.対人摩耗	.25 **	.07	.13	.22 **	.28 **	-.05	.21 **	.40 **	.34 **	.39 **	.65 **	.71 **	-	.80 **	
14.対人ストレス合計	.28 **	.09	.14	.27 **	.38 **	-.05	.26 **	.45 **	.37 **	.43 **	.88 **	.90 **	.84 **	-	
15.BDI	.41 **	.29 **	.21 **	.26 **	.44 **	-.11	.30 **	.43 **	.36 **	.42 **	.35 **	.49 **	.44 **	.49 **	-

** $p<.01$, * $p<.05$

Table 3　対人ストレス尺度の合計得点と各因子の得点を従属変数とした重回帰分析の結果

変数	β		R^2	
従属変数：対人ストレス合計			.30	**
ネガティブな反すう傾向	.04			
BAQ 合計	.11			
回避	.20	**		
BDI	.36	**		
従属変数：対人葛藤			.17	**
ネガティブな反すう傾向	-.09			
BAQ 合計	.16	*		
回避	.15			
BDI	.28	**		
従属変数：対人劣等			.35	**
ネガティブな反すう傾向	.17	*		
BAQ 合計	.11			
回避	.23	**		
BDI	.30	**		
従属変数：対人摩耗			.23	**
ネガティブな反すう傾向	.04			
BAQ 合計	.07			
回避	.19	**		
BDI	.33	**		

** $p<.01$, * $p<.05$

考察

本研究は，ネガティブな反すうが対人ストレッサーに影響を与えているかを検討することを目的とした。また，ネガティブな反すうが対人ストレッサーの生成を促すメカニズムについて，媒介変数の候補として攻撃性と社会的状況からの回避行動を取り上げ，探索することを目的とした。

まず，ネガティブな反すうは，対人ストレス尺度の合計得点と正の有意な相関が認められた。村山・岡安(2014)の研究では，ネガティブな反すう傾向は「生きがいや人間関係」に関するストレッサーと正の有意な相関が認められているが，本研究ではネガティブな反すうと対人ストレッサーという，より限定されたストレッサーとの関連を示せた点で，研究を発展できたと言える。また，対人ストレス尺度を因子毎に見ると，ネガティブな反すうは，対人劣等，対人摩耗と正の有意な相関が認められたが，対人葛藤とは有意な相関が認められなかった。それに加え，抑うつの影響を統制した場合，ネガティブな反すうと対人磨耗や対人ストレス合計との有意な関連は消失し，対人劣等のみと有意な偏相関が認められた。つまり，ネガティブな反すうと関連が認められる対人ストレッサーの領域は限定されており，また，対人磨耗との関連については，抑うつや他の関連する要因によって媒介されていると言える。この点については重回帰分析の考察の箇所で検討する。

続いて，ネガティブな反すうと，媒介変数の候補として挙げた要因との関連について考察する。ネガティブな反すう傾向は，BAQ の中で短気，敵意，および BAQ 合計と正の有意な相関が認められたが，身体的攻撃と言語的攻撃との相関は認められなかった。齋藤他(2008)では，ネガティブな反すう傾向は，BAQ の中で短気と敵意と正の有意な相関が認められ，言語的攻撃とは負の有意な相関が認められた。本研究では言語的攻撃とは有意な相関が認められなかったが，齋藤他(2008)の先行研究とほぼ同様の結果になったと言える。続いて，抑うつの影響を統制した偏相関係数を算出した結果，敵意とのみ正の有意な相関が認められた。このことから，ネガティブな反すうを持続させやすい者は，敵意の因子が測定する，他者に対する否定的な信念・態度が強いことが示唆された。敵意は特に認知的な要因を測定していることから，ネガティブな事柄について反すうしやすい者は，他者の態度についても否定的に評価しやいのだと言える。一方，ネガティブな反すう傾向は回避行動とも正の有意な相関が認められ，この関連は抑うつの影響を統制しても有意であった。これは，城月他(2007)の研究と同様の結果であった。ネガティブな反すうを持続させやすい者は，他者との交流後に，その状況における失敗等について繰り返し考え，また，同様の事態が将来にも起きてしまうと考えるために，社会的状況を避ける傾向が強まるのだろう。

最後に，ネガティブな反すうが対人ストレッサーの生成を促すメカニズムについて考察する。ネガティブな反すう，攻撃性，回避行動，および抑うつを独立変数，対人ストレスを従属変数とした重回帰分析を行った結果，回避行動と抑うつの標準偏回帰係数が有意であった。ネガティブな反すうと回避行動は，抑うつの影響を統制した上でも正の偏相関が認められたことから，ネガティブな反すうは社会的状況からの回避行動を増加させることを介して対人ストレッサーの生成を促していることが示唆された。

しかし，対人ストレス尺度を因子毎に分け，それぞれ

を従属変数とした重回帰分析では，独立変数と対人ストレッサーとの関連に差が認められた。以下では従属変数毎に考察を行う。

対人劣等と対人磨耗を従属変数とした場合，回避行動の標準偏回帰係数が有意であった。対人劣等は社会的スキルの欠如などにより劣等感を触発する事態であり，例えば「知人が自分のことをどう思っているのか気になった」，「周りの人から疎外されていると感じるようなことがあった」といった項目から構成される。これらの出来事は，回避行動によって対人関係が希薄化したり，他者の自分に対する印象を害してしまったために起きる事態であると解釈できる。また，対人磨耗は，「テンポの合わない人と会話した」,「あまり親しくない人と会話した」など，相手と親しくなる前段階において経験される出来事であると解釈できる。回避行動によって，知り合った他者と親しくなることができず，その結果，その相手と会った際に対人磨耗のストレッサーを経験することになると考えられる。

なお，ネガティブな反すうは対人劣等と直接関連が認められた。これは，対人劣等の項目は，認知的な歪曲によって経験された内容も含んでいるからであると考えられる。例えば，「知人が自分のことをどう思っているのか気になった」という項目の経験は，その思考を生み出す客観的な出来事への遭遇に加え，そのような出来事に遭遇していなくても，自身の思い込みによって「気になった」可能性もある。ネガティブな反すうは正にそのような認知的な歪曲を含んでいるため，対人劣等との直接的な関連が認められたのかもしれない。あるいは，ネガティブな反すうと対人劣等は，本研究では測定されていない他の変数によって媒介されている可能性もある。この点については今後の検討に値するだろう。

一方，対人葛藤を従属変数とした重回帰分析を行った結果，回避行動やネガティブな反すうの標準偏回帰係数は有意ではなく，攻撃性と抑うつの標準偏回帰係数のみ有意であった。先述の通り，ネガティブな反すうとBAQの各得点の関連は弱く，抑うつの影響を統制した場合，ネガティブな反すうとBAQの合計得点の有意な関連は消失した。そのため，攻撃性はネガティブな反すうとは独立したプロセスを経て対人ストレッサーを増加させていると考えられる。対人葛藤は社会の規範からは逸脱した顕在的な対人衝突事態であり，「知人とけんかした」，「知人から責められた」といった項目から構成される。正に他者との関係が悪化した事態であり，その一因はこの出来事を経験した者自身（つまり調査の回答者自身）にあると考えられる。重回帰分析の結果より，攻撃的な反応が対人葛藤を招いていると考えられる。

なお，対人ストレス尺度の各因子や合計得点を従属変数としたすべての重回帰分析において，BDIの標準偏回帰係数が有意だった。しかし，BDIでは認知・情動・身体といった側面に表れる症状を測定しているため，この症状自体が対人ストレッサーの生成を導いているとは考えがたい。もし抑うつが対人ストレッサーの生成の先行要因であると考えるのであれば，この関連を，本研究では測定していない何らかの行動的要因が媒介していると考えられる。あるいは，対人ストレッサーが抑うつの増加を招いている可能性も高い。

抑うつと対人ストレッサーの因果関係について議論したが，このことは他の独立変数と対人ストレッサーの関連にも当てはまる。例えば，対人劣等や対人磨耗のストレッサーに遭遇した結果，回避行動が増加したり，対人葛藤のストレッサーに遭遇した結果，攻撃的な反応が表出されることもあるだろう。本研究は一時点で調査を行った横断的な検討であり，因果関係について議論することは難しい。今後は縦断的な調査などを行い，変数間の因果関係について検討することが望まれる。

また，本研究の対象は大学生サンプルのみであるため，今後，成人などの大学生以外のサンプルにおいても本研究の結果が同様に得られるかを検討する必要があるだろう。

引用文献

安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子(1999). 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性，信頼性の検討　心理学研究, *70*, 384-392.

朝倉　聡・井上誠士郎・佐々木史・佐々木幸哉・北川信樹・井上猛・傳田健三・伊藤ますみ・松原良次・小山　司(2002). Liebowitz Social Anxiety Scale(LSAS)日本語版の信頼性および妥当性の検討　精神医学, *44*, 1077-1084.

Buss, A. H., & Perry, M.(1992). The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, *63*, 452-459.

橋本　剛(1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み　社会心理学研究, *13*, 64-75.

橋本　剛(2003). 対人ストレスの定義と種類――レビューと仮説生成的研究による再検討――　人文論集(静岡大学人文学部), *54*, 21-57.

伊藤　拓・上里一郎(2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討　カウンセリング研究, *34*, 31-42.

伊藤　拓・竹中晃二・上里一郎(2005). 抑うつの心理的要因の共通要素――完全主義，執着性格，非機能的態度とうつ状態の関連性におけるネガティブな反すうの位置づけ――　教育心理学研究, *53*, 162-171.

小嶋雅代・古川壽亮(2003). 日本版BDI-Ⅱベック抑うつ質問票手引き　日本文化科学社

村山恭朗・岡安孝弘(2012a). 大学生と30・40代成人を対象とした加齢に伴う抑うつ的反すうの変化に関する一研究　行動療法研究, *38*, 215-224.
村山恭朗・岡安孝弘(2012b). 女子大学生を対象としたネガティブな反すうの安定性およびストレッサーとの相互関係に関する縦断的検討　健康心理学研究, *25*, 67-76.
村山恭朗・岡安孝弘(2014). コミュニティを対象とした反すうとストレッサーの相互関係が及ぼす抑うつへの縦断的影響　行動療法研究, *40*, 13-22.
大渕憲一・北村俊則・織田信男・市原眞紀(1994). 攻撃性の自己評定法――文献展望――　季刊精神科診断学, *5*, 443-455.
齋藤路子・沢崎達夫・今野裕之(2008). 自己志向的完全主義と攻撃性および自己への攻撃性の関連の検討ー抑うつ，ネガティブな反すうを媒介としてー　パーソナリティ研究, *17*, 60-71.
城月健太郎・笹川智子・野村　忍(2007). ネガティブな反すうが社会不安傾向に与える影響　健康心理学研究, *20*, 42-48.

Influence of Negative Ruminations on Increasing Interpersonal Stressors among University Students

Mediating Role of Aggression and Avoidance Behavior in Social Situations

OZAWA, Takamasa, HASEGAWA, Akira

Abstract

The influence of negative ruminations on increasing interpersonal stressors, and the mediating role of aggression and avoidance behaviors in social situations were investigated. Undergraduate students (N=168) completed the Negative Rumination Scale, Interpersonal Stress Events Scale, Japanese version of the Buss-Perry Aggression Questionnaire, Libowitz Social Anxiety Scale, and Beck Depression Inventory-Second Edition. Results indicated that negative rumination score was positively correlated with the increase in interpersonal stressors. A multiple regression analysis with total Interpersonal Stress Events Scale score as the dependent variable and each score on the other scales as independent variables indicated that depression and avoidance behaviors in social situations were positively associated with the frequency of interpersonal stressors. These findings suggest that individuals with high negative rumination tendencies generate interpersonal stressors via increased avoidance behaviors related to social situations.

Keywords：negative rumination, interpersonal stress, aggression, avoidance behavior in social situations, depression.

— 2015.6.29 受稿、2015.9.27 受理 —